

展示内容

◆NIPPONIA HOTEL 竹原製塩町



大正時代の御殿飾り（京都丸平製）

丸平は安永年間の創業以来、約 300 年にわたり優雅で伝統的な職人技を継承し続ける、京都「丸平大木人形店」。その作品は京人形・雛人形の逸品として、歴代の天皇家をはじめ多くの人に愛されています。昭和天皇妃・香淳皇后、雅子さまもお求めに来られた、歴代の天皇家や旧家御用達のお店です

後ろの色紙は田能村直入画（本物かどうかは不明）

幕末から明治時代にかけて活躍した日本画家。日本最後期の文人画家として知られる。

田能村竹田の養継子。幼名は、はじめ松太、のち傳太。諱は、はじめ蓼、のち痴。字は、はじめ虚紅、のち顧絶。号は、はじめ小虎、のち直入。通称は小虎とした。別号に竹翁、忘斎、煌斎、芋仙、布袋庵、無声詩客などがある。豊後直入郡竹田町（現在の大分県竹田市）生まれ。



島台

旧水出邸の蔵にあったもの
結納の時などに送られたものと推測
時代は不明

木目込み人形は新しいもの



大正時代の極小御殿飾り（京都丸平製）

上記御殿飾り同様丸平製の木目込み人形

木目込人形（きめこみにんぎょう）は、木製の人形の一種。賀茂人形、賀茂川人形、柳人形とも[1]。

桐塑または木で作られた人形に、衣服の皺や模様の形に本体に筋彫りを入れ、筋彫りに目打ちなどで布の端を押し込んで衣装を着ているように仕立てた人形。この、筋彫りに布の端を押し込む動作を「木目込む（決め込む）」ということから、木目込人形と呼ばれるようになった。全身が桐塑でできているものと、頭を別に

作って完成した胴体に差し込んだものがあるが、頭を別に仕立てる場合でも目にはガラスを入れず、描き目であることが多い。



掛け軸は昭和のもの

御殿飾りはもう1か所の床の間に飾っている2つとも昭和30年代ぐらいのもの

陶器のお雛様は庄内土人形

御殿雛〔ごてんびな〕

京都では、内裏雛を飾る館のことを御殿といいますが、その中に一対の雛を置く形式を「御殿飾り」と呼びました。京阪を中心に、この様式の雛飾りが登場するのは江戸時代末期のことです。御殿は御所の紫宸殿(ししんでん)になぞらえたものと思われるが、華やかな貴族文化への憧れが育んだ復古的な雛飾りといえます。

■旧笠井邸

江戸時代から平成までのいろいろな雛人形が楽しめ、雛めぐり会場で最も多くの種類の雛人形を展示しています。

1階

天保8年(1837年・174年前)の芥子雛

五人囃子でなく五人楽人が女性の人形になっているのが特徴的。

京都市持ち物 くま手・竹ぼうき・塵取り



江戸時代の享保雛(雛人形の種類参照)

展示している人形が享保時代(1716年~1735年)に製作されたものかどうかはわかりません。この時代に形づくられ後にこの人形の形を享保雛と呼ぶようになったものです



江戸時代の次郎左衛門雛
丸顔が特徴的（雛人形の種類参照）



江戸時代の内裏雛



明治時代の京都丸平製の内裏雛

丸平は安永年間の創業以来、約 300 年にわたり優雅で伝統的な職人技を継承し続ける、京都「丸平大木人形店」。その作品は京人形・雛人形の逸品として、歴代の天皇家をはじめ多くの人に愛されています。昭和天皇妃・香淳皇后、雅子さまもお求めに来られた、歴代の天皇家や旧家御用達のお店です



昭和3年・昭和18年の御殿雛

雛人形を笠井邸に展示をはじめたときから毎年展示しています



大正時代内裏雛・三人官女・道具類



2階

昭和初期～50年代までの御殿雛・7段飾りを飾っています



■竹楽（旧村上邸）

明治時代の内裏雛・三人官女 2セット 1階

旧村上邸の蔵にあったもので冠の状態も良い。



天保 14 年（1843 年・171 年前）の雌雛
江戸時代貝合わせ・貝桶



たけはら町並雛めぐりの始まり

保存地区における空家が増加する中、NPO法人による空家の再生・保存活動が 2004 年から開始
2006 年 2 月修復した旧笠井邸にて大正～平成の雛人形 7 セット展示



メディア等に空き家活用とともに大きく取り上げられ多くの方が来訪

2007 年 2 月「たけはら町並みめぐり～雛人形展～」として町並み全体での開催に拡大（文化庁NPOによる文化財建造物活用モデル事業）竹原市・竹原市観光協会が実施団体として加わる

2008 年より竹原町並み保存会も実施団体加わり現在に至る

雛人形の種類

◎次郎左衛門雛〔じろざえもんびな〕

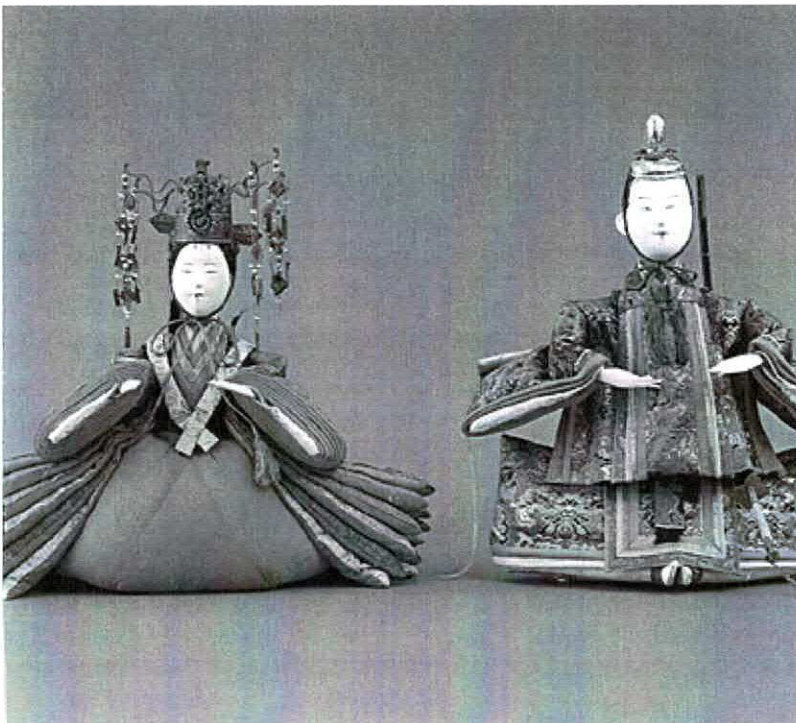
江戸時代に流行した丸顔の衣裳着雛。

江戸時代、寛文（1660年代）の頃、京都の雛屋次郎左衛門が創始したという雛の総称。丸顔に細い眼、小さい唇と鼻などが特徴とされる。18世紀後半の江戸でもてはやされ、公家や上級の武家の間では流行とかかわりなく雛の本流として長く重んじられたといわれています。



◎享保雛〔きょうほびな〕

江戸時代に流行した面長の衣裳着雛。寛永雛から発達したとされるもので、面長な顔に切れ長な目、能面に似た静かな表情をしているのが特長。衣裳は装飾性に富み、町雛として愛用された。男雛は両袖を張ったデザインで、太刀を差して笏（しゃく）を手にしています。女雛は五衣（いつつぎぬ）、唐衣（からころも）姿で、袴は綿を入れて膨らませ、ボリュームのある雛人形です。



古今雛〔こきんびな〕

享保雛以後新しく工夫された町雛の総称。

明和～安永（1760～70年代）頃、江戸十軒店の原舟月が作りはじめて流行した。現在の雛人形に近いもの。



芥子雛〔けしびな〕

江戸時代の中期頃より流行した雛。平均の高さが10cmという小型の雛である。江戸時代中期以降、年々町の雛祭りは派手になっていき、その賑わいは今の私たちの想像を超えていただろうと言われています。そこで、幕府は民間の雛祭りに対してたびたび贅沢を禁止するお触れを出しているようです。しかし、庶民の中で小さくても豪華で贅沢な芥子雛を求めました。杓子粒のように小さいことからこう呼ばれた。

御殿雛〔ごてんびな〕

京都では、内裏雛を飾る館のことを御殿といいますが、その中に一对の雛を置く形式を「御殿飾り」と呼びました。京阪を中心に、この様式の雛飾りが登場するのは江戸時代末期のことです。御殿は御所の紫宸殿(ししんでん)になぞらえたものと思われませんが、華やかな貴族文化への憧れが育んだ復古的な雛飾りといえます。

雛人形の歴史

「雛祭り」はいつ頃から始まったのか歴史的には判然としないが、その起源はいくつか存在する。平安時代の京都で既に平安貴族の子女の雅びな「遊びごと」として行われていた記録が現存している。その当時においても、やはり小さな御所風の御殿「屋形」をしつらえ飾ったものと考えられる。初めは「遊びごと」であり、儀式的なものではなく其処に雛あそびの名称の由来があった。しかし平安時代には川へ紙で作った人形を流す「流し雛」があり、「上巳の節句（穢れ払い）」として雛人形は「災厄よけ」の「守り雛」として祀られるようになった。

江戸時代になり女子の「人形遊び」と節物の「節句の儀式」と結びつき、全国に広まり、飾られるようになった。この遊びである「雛あそび」が節句としての「雛祭り」へと変わったのは天正年間以降のことであり、この時代から三月の節句の祓に雛祭りを行うようになったと推測されている。もっとも、この時代には飾り物としての古の形式と、一生の災厄をこの人形に身代りさせるという祭礼的意味合いが強くなり、武家子女など身分の高い女性の嫁入り道具の家財のひとつに数えられるようにもなった。その為、自然と華美になり、より贅沢なものへ流れた。

江戸時代初期は形代の名残を残す立った形の「立雛」や、坐った形の「坐り雛」（寛永雛）が作られていたが、これらは男女一対の内裏雛を飾るだけの物であった。その後時代が下ると人形は精巧さを増し、十二単の装束を着せた「元禄雛」、大型の「享保雛」などが作られたが、これらは豪華な金箔張りの屏風の前に内裏の人形を並べた立派なものだった。この享保年間、人々の消費を当時の幕府によって規制するため一時的に大型の雛人形が禁止された。しかし、この規制を逆手に取り「芥子雛」と呼ばれる精巧を極めた小さな雛人形（わずか数センチの大きさ）が流行することになる。江戸時代後期には「有職雛」とよばれる宮中の雅びな装束を正確に再現したものが現れ、さらに今日の雛人形につながる「古今雛」が現れた。この後、江戸末期から明治にかけて雛飾りは2人だけの内裏人形から、嫁入り道具や台所の再現、内裏人形につき従う従者人形たちや小道具、御殿や檀飾りなど急速にセットが増え、スケールも大きくなっていった。

お雛と雌雛の飾り方

内裏雛や人形の配置に決まりごとはない。しかし壇上の内裏雛は内裏の宮中の並び方を人形で模することができる。中国の唐や日本では古来は「左」が上の位であった。人形では左大臣（雛では髭のある年配の方）が一番の上位で天皇から見ての左側（我々の向かって右）にいる。ちなみに飾り物の「左近の桜、右近の橘」での桜は天皇の左側になり、これは宮中の紫宸殿の敷地に実際に植えてある樹木の並びでもある。明治天皇の時代までは左が高位というそのような伝統があったため天皇である帝は左に立った。しかし明治の文明開化で日本も洋化し、その後に最初の即位式を挙げた大正天皇は西洋式に倣い右に立った。それが以降から皇室の伝統になり、近代になってからは昭和天皇は何時も右に立ち香淳皇后が左に並んだ。

それを真似て東京では、男雛を右（向かって左）に配置する家庭が多くなった。永い歴史のある京都を含む畿内や西日本では、旧くからの伝統を重んじ、現代でも男雛を向かって右に置く家庭が多い。社団法人日本人形協会では昭和天皇の即位以来、男雛を向かって左に置くのを「現代式」、右に置くのを「古式」とするが、どちらでも構わないとしている。

※各施設の展示は大正時代までを古式、昭和より現代式に展示

＜三人官女＞

三人官女の形式そのものは何通りもあって、両端が立って中央が座る形、あるいはその反対、または三人とも立っているものもあります。

三人官女の場合、中央には眉を剃った既婚婦人で、口の中が黒く塗られているのはお歯黒をしているためです。ほかの2人は未婚で眉がそのまま、お歯黒もしていないというのが基本です。

三人官女の持ち物は、長柄銚子、加銚子、盃（三宝）が一般的ですが、京式は盃でなく島台を持ちます。なぜ、中央の女性だけが結婚している必要があるのか。婚礼における、”三人官女”の役割を知っていればわかる。まず両端の二人（銚子と提子を持っている）は、雄蝶・雌蝶として婚礼の”式三献”（三三九度）を執り行う役で、その行為に慣れてさえいれば未婚でかまわない。

中央は、本来なら何も持たないのだが（人形はバランス上、式三献に使う盃を載せた「三方」か、婚礼に飾る「島台」を持っている）、侍女房（介添え、介錯）といって、花嫁の隣に座って、婚礼の補佐の役。花嫁のほとんどは、婚礼が初めてで、しかも婚礼は当事者以外には（家族にも）非公開なので、どう振る舞っていいかわからない。

昔の花嫁は、たいてい10代だから、式三献で酒を飲む儀式もよく知らないだろう。なので、花嫁の振るまいをいちいち指導し、動作を手伝うのが侍女房の役割。当然、婚礼の経験者でなくてはならない。ということで、中央の女性が既婚という理由

＜五人囃子・楽人＞

雛人形の段飾りと言えば「五人囃子（ごにんばやし）」を思い浮かべる方も多い事でしょう。

雛祭りの歌でも、「五人囃子の笛太鼓〜♪」なんてフレーズがあります。

しかし雛人形では、五人囃子ではなく五楽人がセットとなっている場合があります。

五人囃子（ごにんばやし）

左から順に、太鼓（たいこ）、大鼓（おおかわ）、小鼓（こづつみ）、笛（ふえ）、謡（うたい）です。

能楽をかたどったもので、囃子方（＝演奏担当）の4人に、謡（＝声楽担当）で5人となります。

見た目ですぐと分かる楽人との大きな違いは、「髪型がおかっぱ頭」「謡（楽器ではなく扇子を持っています）がいるかないか」でしょうか。主に童顔をしてる事が多いです。

五楽人（ごがくにん）

左から順に、横笛、縦笛、火焰太鼓（かえんだいこ）、笙（しょう）、羯鼓（かっこ）です。

五人囃子との違いは、火焰太鼓の有る無しを見ると判別しやすいですね。

五人囃子が能楽なのに対し、五楽人は雅楽を奏でています。ちなみに七楽人になると、ここに琴、琵琶が加わります。

<隋身（ずいじん）>

主役の内裏雛を警護する武官。右大臣（うだいじん：若者）と 左大臣（さだいじん：老人）。上の方の内裏雛から見て、右側が右大臣、左側が左大臣になる。

<仕丁>

宮中の雑役を務める人で、それぞれ、台傘（だいがさ）沓台（くつだい）立傘（たてがさ）を持つ。

三人の表情は、怒り、泣き、笑い。

<菱餅（ひしもち）>

菱餅の色の由来は諸説あるようですが、今日は比較的一般的な解釈のものを二つご紹介します。

【その①】菱餅の色の意味するところは、緑…健康・紅（ピンク）…魔除け・白…浄化。

【その②】紅は桃の花を象徴し、白は地上に残る雪、緑は雪の下に芽吹く新緑を象徴している。

つまり菱餅の色の順序は【地上には桃の花が咲き、地表には雪が残り、その雪の下には新緑の緑がありますよ】という、雛祭りの頃の情景を表すものだったので

それぞれ、昔は、原料として薬効のあるものが使われていた。

ピンク クチナシの実・白 菱の実・緑 蓬（よもぎ）